

次の文章を読んで、後の問一〜九に答えなさい。

A  
私の手の動きは何を感じようとするかで異なってくる。外形を知ろうとするとき、表面の手触りを知ろうとするとき、手の動きは異なる。ざらつく表面のざらつきを感じるためには、痛みを生じない程度の手の圧力と速度で抵抗感を生み出しつつ、手を等速に動かすことが必要である。一方、その形を知るときには、ざらつきの抵抗を生むべくかけられた圧力は必要ない。たとえば表面のうねりを感じるためには、等速というよりむしろ、そのうねりのリズムに合わせた緩急をつけて手を動かす必要がある。このように知覚表象や知覚的意味が生命的意味によって規定されているとき、それを浮かび上がらせる知覚の過程自体がその生命的意味と切り離して考えられないものになってくる。

もちろん、同様の差は、知覚される意味が生命的意味であるときだけに限定して生じるのではない。表面の肌理<sup>キ</sup>をなでる手の動きと、形をなぞる手の動きが違うのは当然である。こういう相違は、知覚される性質の相違に対応して生じる。したがって、知覚される意味に応じて知覚過程の差が生じるということは、生命的意味の看取の場合にかぎらず一般的に言える。つまり、一般的に、知覚される意味と知覚過程との一体性を語ることは問題なく可能なのである。

触り方の特性に応じて触覚的な感覚には論理的、客観的に無限のパターンが可能だろう。たとえばつるつるとした表面を指で規則的にたたくことは特有の触覚を生じ、ざらつく表面をたたくことはまた別の感覚を生じるだろう。しかし客観的には触覚のふたつのタイプでありうるこれらが、現実には触覚の独立したタイプとして確立されることはない。可能な多くの感覚のなかで、ひとはヌルヌルだとかスベスベなどの有限な数の触覚的性質だけをとりたてて、触覚のタイプとしてとりあげている。それはなぜか。そこに特別な生命的意味を見てとるからである。これに対し、つるつるとした表面をたたくことかざらざらした表面をたたくことにはとりたてて何かの生命的意味が見てとられることがないから、ひとつの特有の感覚性質と見なされないであろう。

(1) 私<sup>1</sup>の生の文脈に依じて、生命的意味が見てとられる。それはまずは有用性——これももちろん生命的な意味である——であろう。だが有用・有害とは関係なくとも、生命的な意味が見てとられるものは、そのことによつて私<sup>2</sup>の目をひく。だとすれば、生命的意味が世界に見てとられるということが知覚を可能にする前提条件——ほかの仕方で前提条件がみだされる可能性は排除できないが——である。客観的な観点からいえば、あるパターンの手の動きは何らかの触覚情報を生むことになるだろうが、知覚する私<sup>3</sup>にとつて、そのすべてが注目<sup>3</sup>に値するもの、知覚の対象とするに値するものではないのである。

このように考えてみると、生命的意味こそまず、世界のうちに知覚的意味として見てとられる資格を備えたものであり、知覚はそのような意味を見

てとるべく、それぞれ特別な仕方では組織されるといふことが示唆される。つまり、知覚される意味として、生命的意味は例外的なものであるところから

X

で特権的なものとさえいえよう。したがって、生のかかわり方である態勢が関与する知覚もまた、

Y

なものではない。

ここで示唆された生命的意味の広がりや別の観点から裏付けるコンキョ<sup>A</sup>をあげてみよう。メルローポンティがすでに指摘していることであるが、ある感覚の固有の感覚性質を別種の感覚の感覚性質に適用する比喩が数多くある。このことは、生命的意味の広がりや示している。暖かい色、柔らかな音、といった比喩表現は、触覚的性質をその本来属する感覚領域ではない視覚や聴覚に適用している。このようなカテゴリーの「誤用」<sup>E</sup>にもかかわらず意味が理解できるのは、両感覚領域をまたぐ共通項があるからだと考えられる。それが生命的意味である。触覚的暖かさや「暖色」と呼ばれる色は、ともにひとと世界へと積極的にむかわせる衝動をカンキ<sup>I</sup>する生命的意味を持つ。この意味が感覚領域をまたぐ共通項となり、「暖かい色」というような表現を意味あるものになっている。

ところで、先にも触れたように、メルローポンティは人間のうちに、思考し意志する上位層の人格的実存と、身体活動を営み知覚する下位層の身体的実存の二層を見てとっている。しかも感情を上位層の人格的実存に割り振っている箇所もある。これは私が批判してきた態勢をふたつに分割する「二段階説」を擁護する議論にならないだろうか。私は態勢において知覚的下位層と感情などの上位層が不可分のものとして働いていることを強調してきたが、メルローポンティは両層が分離することの意義を強調している。彼によれば、このような分離により知覚をはじめとする身体活動は「自動化」<sup>F</sup>できる。そのことによって、上位層が下位層の活動を主導することに煩わされることなく、固有の活動である思考や判断、意志活動などに専念できるのだという。感情的生活についても同様である。つまり、私<sup>(5)</sup>のなかの分離が上位層の活動にとって不可欠の役割を果たしているというわけである。しかしながらこの上下層の切れ目は、私が態勢に関して批判してきたその切れ目とおなじものではないだろうか。メルローポンティの主張と私の主張とは矛盾対立しているのではないか。

佐藤義之

『「態勢」の哲学』より

問一 傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の選択肢から、それぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号はアが 1、イが 2。

- |   |   |
|---|---|
| <p>ア <span style="border-bottom: 1px solid black; padding: 0 5px;">コンキヨ</span></p> <p>(a) あらぬコクウを眺めていた</p> <p>(b) 筆者に掲載をキョヒされた</p> <p>(c) 確かなシヨウウコがないうわさ話</p> <p>(d) マイキヨにいとまがない</p> <p>(e) カコ<sup>レ</sup>の出来事だ</p> | <p>イ <span style="border-bottom: 1px solid black; padding: 0 5px;">カンキ</span></p> <p>(a) <span style="border-bottom: 1px solid black; padding: 0 5px;">カンソ</span>な住まい</p> <p>(b) 証人をシヨウウカンする</p> <p>(c) <span style="border-bottom: 1px solid black; padding: 0 5px;">カンワ</span>休題</p> <p>(d) 台所の<span style="border-bottom: 1px solid black; padding: 0 5px;">カンキ</span>センを回す</p> <p>(e) 戦場からセイカンしたばかり</p> |
|---|---|

問二 傍線部A「私の手の動きは何を感じようとするかで異なってくる」を説明したものととして、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 3。

- (a) 外形を知ろうとするときも、表面の手触りを知ろうとするときも、手は同じように動く。
- (b) ざらついた表面を感じるためには、傷つかない程度に手を動かすことが大切になってくるし、表面のうねりを感じるためには、うねりにそって手を動かすことが求められる。
- (c) 外形を知ろうとするときには、手のある程度の圧力を加えて等速に動かす必要があり、表面の手触りを知ろうとするときには、そうした圧力の必要はない。
- (d) 形のうねる様子を知ろうとするときには、緩急を付けて手を動かす必要があり、表面の手触りを知ろうとするときには、一定の圧力をかけて手を等速に動かす必要がある。
- (e) 知覚表象が知覚的意味をもたらすとき、知覚の過程自体が生命的な意味を帯びたものとして、私の前に立ち現れてくる。

問三 傍線部Bの「知覚される意味と知覚過程との一体性」とは、どのような意味か、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号を

マークしなさい。解答番号は  。

- (a) 人が現実を認識する方法と、認識において通過する感覚は同一のものである。
- (b) どのようにして知覚したかということ、知覚を通して理解された内容は、不可分の関係にある。
- (c) 人間がものを理解することは、ものごとを体験することそのものである。
- (d) ものごとを知覚するということは、知覚される性質の相違に応じて異なった意味を持つことになる。
- (e) 我々が知覚することと、知覚にともなう具体的な動作には、それなりの関連がある。

問四 傍線部Cの「客観的には触感覚のふたつのタイプでありうるこれらが、現実に触感覚の独立したタイプとして確立されることはない」とは、ど

のような意味か、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は  。

- (a) つるつるした表面をなでることと、ざらざらした表面をたたくことは、まったく別の触感覚として捉えている。
- (b) つるつるした表面をたたくことと、ざらざらした表面をたたくことは、たたくという動作から見れば同じことを行っていることになる。
- (c) つるつるした表面とざらざらした表面をなでることによって得られるのは別々の触感覚であるが、それを区別して捉えている人間はいない。
- (d) つるつるという言葉とざらざらという言葉では、二つの動作から得られる触感覚の違いを十分に捉えることができていない。
- (e) つるつるした表面とざらざらした表面をたたくことで感じる触感覚は別の表現で捉えうる触感覚だが、実際には別の表現で捉えていない。

問五 空欄  と  に入る言葉として最も適切な組み合わせを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号

は  。

- (a) X 生命的 Y 楽観的
- (b) X 外形的 Y 正統的
- (c) X 規範的 Y 個別的
- (d) X 日常的 Y 徹底的
- (e) X 典型的 Y 例外的

問六 傍線部D「ある感覚の固有の感覚性質を別種の感覚の感覚性質に適用する比喩」の例として最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄

の記号をマークしなさい。解答番号は 7。

- ① 黄色い歓声
- ② そびえ立つ富士
- ③ 一仕事終えたカラス
- ④ うだるような暑さ
- ⑤ グラグラと沸いているお湯

問七 傍線部E「誤用」の前後に筆者がカギ括弧を付けた理由として最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解

答番号は 8。

- ① カテゴリーの違いが重大であることを強調する必要があると考えたため。
- ② 一見すると間違いと思えるが、必ずしも誤りとは言えないことを示すため。
- ③ 「誤用」という言葉が強い言い方であるため、その印象を和らげたかったため。
- ④ 本来なら「互用」と書くべき所なのに、わざと「誤用」という表記を使っているため。
- ⑤ 次行の「暖色」という言葉と対比的に示そうとしたため。

問八 傍線部F「この上下層の切れ目は、私が態勢に関して批判してきたその切れ目とおなじものではないだろうか」と筆者が考えていることを説明

したものととして、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 9。

① メルロ＝ポンティの言う二つの区別は、筆者が言う二つの区別と同じであるから、二人の意見は一致している。  
② 二つの層に分かれているからこそ、思考や判断、意志活動という上位層は、下位層である身体活動と独立して活動できるようになっている。  
③ 筆者は知覚における上位層と下位層を不可分のものとして捉えているが、メルロ＝ポンティは別のものと捉えていて、意見が異なっていることを明確にしようとしている。

④ メルロ＝ポンティが分離するべきとしている二層は、筆者が分割するべきではないと主張する二層と同じものではないかと問題提起している。

⑤ メルロ＝ポンティの上位層・下位層の二層説は、筆者が態勢を二つに分割するべきだという考えを擁護するものとして考えられている。

問九 五箇所ある波線部「私」の中で、指示している対象が異なっているものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番

号は 10。

① (1)

② (2)

③ (3)

④ (4)

⑤ (5)